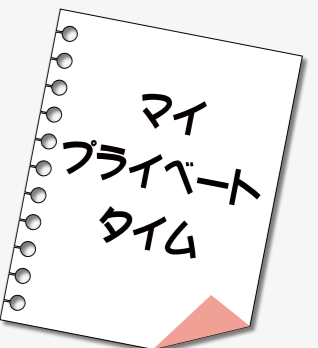


庭に来る野鳥の声を楽しみ

いしかわみちまさ
美濃市長(岐阜県) 石川道政
Michimasa Ishikawa



美濃市の紹介

美濃市は、清流「長良川」が流れる自然豊かな、かつ、伝統文化のまちです。「美濃和紙」は、1300年の歴史があり、代表的な「本美濃紙」は、国の重要無形文化財の指定を受け、現在、ユネスコ世界無形文化遺産の登録申請中です。市の中心市街地には、国の「重要伝統的建造物群保存地区」に指定された「うだつの上がる」美しい町並みがあります。今は、9・3 haの電線が地中化され、90棟余りの修復・修景も進み、町並みで催される「美濃和紙あかりアート展」には、2日間で10万人を超す観光客が訪れ、おかげさまで市内には、年間120万人が訪れる



散歩でよく立ち寄る長良川と川湊灯台

までになりました。そして本年、国の「歴史的風致維持向上計画」の認定を受け、全市の「歴史的風致を活かしたまちづくり」に取り組んでいます。

私の生い立ち

私は、美濃和紙の原料商の三代目の長男として生まれました。私の幼いころが町の全盛期で、市内には3000戸を超す和紙職人が従事していました。町に立ち並ぶ大店は、間口は9mから18mと狭いが奥行は50m近くあり、敷地は、500坪から1000坪程で、店・住居・倉・中庭があり、多くが茶室を構えていました。特に「うだつの上がる」町家の連なる様子は、正に豪商の町であり、一世を風靡していました。しかし、昭和40年代中ごろには衰退、町全体も空洞化して、昼間でも人通りの少ない町と化してしまいました。私は、明大商科を卒業し東京でサラリーマンをしていましたが、昭和41年、家業を継ぐため、26歳で帰郷しました。倒産寸前の会社でしたが、和紙の加工・製造が順調に行き、10年後の36歳になるころには、会社も軌道に乗せることができ、J.Cの理事長も務め、「仕事と奉仕」を両立させていました。40歳代は、家業の安定と後継者づくりをし、50歳を超え社長を退任、「美濃市を変えよう」と政治の道に進みました。



美濃和紙の里会館前を通過する国際自転車レース「ツアーオブジャパン・美濃ステージ」

54歳で市長に挑戦。3期目を目指す現職の市長と一騎打ちをして、わずか135票差で市長に当選し、以来5期を迎えました。

私の信条

私の信条は、「初志貫徹」。何事も思いつかねば成らず、思い起こして為せば何時か成るの思いです。常に時代の先を読み、常に問題意識を持ち、将来の姿を描き、目標を設定しブレずに行動に移す「PDCA」の実践です。そのためには、師に学び広い見識を養い、友を得て、決断と不屈の闘志で実践、必ず成し遂げることです。サクセスストーリーとして言えば、
①現状はどうか、このまま行ったらどう

- なるのか(問題意識)
 - ②現状がダメなら、変えるにはどうしたらよいか(目標設定)
 - ③最良の策は何か、失敗しても次善の策はあるか(計画)
 - ④それぞれが何を為すか(実行)
 - ⑤何が得られるか(成果)
 - ⑥次のステップは何か(評価と次の目標設定)です。
- メモ程度の日記をつけながら、生活・仕事・家族・遊びについて、日々チェックをしています。

私の余暇

私も仕事ばかりしているわけではあり



うだつの町並みで行われる「美濃和紙あかりアート展」(後ろはうだつの連棟)

野鳥の鳴き声と話

最近、庭に来る野鳥の声を電子辞書で楽しんだり、中西悟堂、内田清之助などの野鳥の作品を読み返し、野鳥の物語や声の描写を読んで楽しんでます。例えば、ホトトギスは「天辺禿げたか」、ヒバリは、質屋の鳥で「日一步、日一步、月に二朱」と鳴く。コジュケイは「何か呉れ何か呉れ」、センダイムシクイに

至っては「焼酎一杯グイイ」と、と軽妙で、活字にするととても面白く、感心します。キジバトは「父粉食え」と鳴くと言われています。きこりの親子が居て、子は山へ毎日食糧を届けていました。幾日も雪が降り、止んでから急いで山へ「そば粉」を届けに行ったところ、父は既に死んでいました。子は悲しみのあまり泣き叫び、ついにキジバトに姿を変え、今も「父粉食え」と鳴くと言われています。カラスは「アーアー」とも「カーカー」とも鳴きますが、カラスは孝行鳥で、自分を育ててくれた老いた親に食料を運び、口移しで食べ物を与えるということです。「カーカー」は、「母アー母アー」かも。このように、鳥の鳴き声を調べたり、姿を見たり、また鳥にまつわる物語を知るのとても楽しく、これからも、暇を見て今まで収集した沢山の本を読み返したり、仕事の合間をぬって野山を歩いて楽しみたいと思っています。



市長室にて(後ろは美濃和紙の障子戸)